大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

うつしの詩學からゆらぎの詩學へ（上）：神韻説再考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011095

うつしの詩學からゆらぎの詩學へ（上）

――神韻説再考――

大平桂一

一　まえがき

過去の中國に於いて詩は單に文學作品として鑑賞されるだけの存在ではなかった。その中の上質のものは、現代の吾々からは想像もつかない程の魔術的な力を持ち、知識人をはじめとする様々な人々によって暗誦され、日常生活のありとあらゆる場面で引用された。上質の詩とは例えば、舊説によると安祿山の亂のさなか、長安に囚われの身となっていた杜甫が書いたとされる「九日藍田崔氏莊」詩をここでは擧げる事にする。

老去悲秋强自寬　老い去らば　秋を悲しむべきも强いて自ら寬（ゆる）うす
興來今日盡君歡　興來りて　今日君が歡を盡くす
羞將短髮還吹帽　羞ずらくは短髮を將（も）つて還お帽を吹かるるを
笑倩旁人爲正冠　笑いて旁人を倩（こ）いて爲めに冠を正さしむ
藍水遠從千澗落　藍水は遠く千澗從り落ち
玉山高並兩峰寒　玉山は高く並びて兩峰寒し
明年此會知誰健　明年此の會知んぬ誰か健（すこやか）なる
醉把茱萸仔細看　醉うて茱萸を把りて仔細に看る

［譯］　私はもはや老いさらばえてきたので／本來果たすべき秋の到來を悲しむという男子の責務を／無理矢理に自らに對して免除することにした。今日は氣まぐれに君子の行動規範を逸脱して君のもてなしを十分に樂しもうと思う。恥ずかしかったのは席上薄くなった頭であるにもかかわらず／帽子を東晉の孟嘉のように吹きとばされてしまったこと。苦笑いをしながら側に居た人にたのんで子路の最後を思いだしつつ冠を直してもらった。藍水は遠く千の瀧から落ちて來、玉山はきわだって高く、かたわらの兩（ふた）つの峰に連（つらな）って寒々とそびえている。來年のこの九日登高の會に、いったい誰が健康で無事に出席できるだろうか。もろもろの思いを

抱きつつ、私は醉っぱらってふと茱萸の實をとってじっと見つめる。

第一句「老去悲秋强自寛」は日本語に譯せば論理的につながって抵抗なく讀めるが、中國語の詩として見ると、「／」のところで大きな斷絶がある。それをつないでいるのが巧妙な典故の運用と音調の美しさである。詳細な分析は吉川幸次郎先生の「九日」という文章にゆずるが、何の意味も考えずただ朗誦する人にも、注釋をたよりに正確に解讀しようとする人にも、それぞれの要求とレベルに應じて反應がかえってくる。第二句は何の屈折もないなと思って最後までくると、「君子は人の歡を盡くさずして以て交を全うするなり」（『禮記』曲禮篇）で完全にひっくりかえされてしまう。第三句・第四句は、風のいたずらで帽子が吹きとばされ、頭髪の薄さが露呈したという事實を諧謔まじりに述べているかと安心していると、最後に「冠を正」しながら殺された子路の死の影が忍び寄るという具合に、まったく息が抜けない。第五句・第六句は最終聯にむかう架橋となっている。「寒」く凍りつく程に澄みきった華北の山水は、ニーチェが「人間と時間のかなた六千フィート」（『この人を見よ』）と形容したアルプスのシルヴァプラナ湖畔の風景以上の意味を杜甫に對してもったに違いない。ここまで數次にわたる屈曲や斷絶によって蓄積されてきたエネルギーはこの聯でさらに增幅され、第七句・第八句で一氣に放出される。この聯についてはくだくだしい説明は不必要であろう。杜甫の先行きに對する不安、不可解で混亂の極にある世界に對する絶望、茱萸に結晶した宇宙の神秘に對する凝視等々、ありとあらゆる讀みが許容される。

「九日藍田崔氏莊」詩はこれまで見てきたように嚴密に構成され、いろんな仕掛けを具えた傑作であるが、これを全體としてではなく、ばらばらに解體して引用してみても多くの効果を期待できるのだ。初老になるまで全力で働いてきた人間が、さあこれから人生を變えるぞというときに「老去悲秋强自寛」とつぶやけばリラックスできるだろうし、若い人がただ秋が來たということだけでこれをうたってもよい。宴會に招かれた客が主人に向かって「興來今日盡君歡」と挨拶すれば主人は大喜びするはずだし、頭髪が薄くなってきたことを他人に指摘された時には「羞將短髪還吹帽」と言いながら肩をすくめてみせればショックは少ないだろう。最後の聯について言えば、私は吉川幸次郎先生を思い出すことなしにこの聯を吟ずることは出來ない。一九七七年、吉川幸次郎先生は京都大學で講演された。遲れて入場したため、演題も内容もまったく記憶にない。ただ講演の最後で先生は「明年此會知誰健、醉把茱萸仔細看。」と書いたあとでゆっくりかみしめるように朗誦された。三年後先生は病を得られて道山に歸せられた。今でも私はその時の凍りついたような

氣分を思い出すし、千二百年前の杜甫と、衰えを自覺され無意識のうちにこの聯を誦された吉川先生を重ねあわせてしまうのである。このような詩のもたらす作者と讀者（引用者）との間の共振關係を私は「ゆらぎ」と名付けることにする。

ただ日常生活の様々な場、あるいは詩の作成の現場で引用されてゆらぎを生ずる本物の詩は唐以前、せいぜい下って宋或いは金までというのが現代の知識層の最大公約數的な意見であろう。今書かれている詩はまったく駄目なものだ、このような自覺が生まれたのは元末明初のことであった。

近世道は漓く氣は弱く、文の振わざること已に甚だし。恣肆を樂しむ者はこれを駁に失いて醇ならず、摹擬を好む者は局に拘れて暢やかならず。喙を合わせ聲を比ぶるも、稍かも自ら凌厲して以て人の耳目を震盪するを得ず。譬うれば猶お敝帚漏扈の家いえに畜えて人ごとにこれを有すると雖も、其の魯弓郜鼎を視るに已に遠きがごとし。

（宋廉宋學士文集卷六十六　蘇平仲文集）[2]

これは散文についての言説であるが、當時の詩と散文の兩方を含んだ古典文學の狀況をみごとに總括している。新たな詩の形式の出現は唐代を以て終わり、新しい題材の追求は宋代を以て終わった。この閉塞的な狀況にさらに拍車をかけたのが、作詩人口の飛躍的な增加によってもたらされた詩人の資質低下である。ほぼ數十萬人と推定される彼等のために、安易な教科書や選本が編纂され、大量生産される詩句は、まったくゆらぎを伴なわない集句に毛の生えた様なものとなった。今日彼等教養俗物の作品はいくつかの總集にとられて殘ってはいるものの、誰も顧みる者とてなく、もちろん引用されたり朗誦されたりすることは絶えてない。もう一方の「恣肆を好む者」とは、あまりに奇矯な表現故に詩の規範からはずれてしまった詩人達を指すであろう。あるいは「文妖」と評された楊維禎とその追隨者を考えてよいかもしれない。

この二つの潮流は決して無關係なものではなく、詩人の資質低下という現實の當然の歸結である。引用すればゆらぎだす詩が作られなくなった、ひいては詩そのものが滅ぶのではないかという危機感が心ある文學者をとらえ、明代は中國文學史上もっとも創作理論が盛んに提唱された時代となった。數ある流派のうち、もっとも尖鋭な現狀認識と理論をもち、のちに王漁洋の神韻説の基礎となったのは古文辭＝格調派であった。

二．前史―古文辭＝格調派について―

これまで古文辭派（以下これで呼稱を統一する。）については様々な言説が爲されてきた。錢謙益の斷罪に端を發する否定的評價はほ

ぼ定まったかに見えるが、その發生の原因に就いてはいまだに説明を聞かない。『古文辭』も直情徑行主義の一つ」（中國詩人選集二集『元明詩概説』月報に見える吉川幸次郎先生の言葉）ではあまりに大雑把なとらえ方だ。明の文明が粗野だということは清朝の士人が言い出し、日本では狩野直喜博士あたりが尻馬に乗って廣めたと理解しているが、實際には古文辭派の感性は彼等の期待に反して中々繊細だ。古文辭派のすごさは、彼等が時代の趨勢を敏感にとらえ、至極あっさりと「創作は模倣から生まれる」という原理を提示して、壓倒的多數を占める凡庸な「詩人」達の營爲を大胆に肯定してしまった點に在る。古文辭派出現以前の感性しかもたぬ人間達には、これ以上の危險思想はなかったであろう。逆に特にきわだった箇性をもっているわけでなく、言うべき志も内容もない普通の人々の間では、「旱天の慈雨」等という陳腐な形容詞がピッタリあてはまる程異常な歡迎を受け、爆發的に流行した。先に「古文辭の感性は中々繊細だ」と述べたが、それは彼等がこのテーゼに從って詩作した結果生じた矛盾に目をつぶることなく、サークル内で眞劍に討論し、また箇々人が獨自に理論の發展擴張を試みるなど、錢謙益の批判は勿論のこと、王漁洋の神韻説の一部さえ包含する自由で柔軟な運動體であったことを言うのである。先ず前七子のサークル内討論を再現することによって、古文辭派を靜的ではなく動的に、外側からではなく内側から、理論體系としてではなく中國文學史上に提出された問題群としてとらえてゆきたいと思う。

『四庫全書總目提要』や『支那詩論史』ですでに指摘されているように、前七子の一人でその驍將李夢陽の長年にわたる盟友であった何景明は李夢陽に書簡を送り、强烈な論爭を展開した。

二―一・何景明の挑戰

何景明の書簡は挨拶の言葉をつらねた後、次の如く立ちあがる。

昔に迫ぼるに、詩を爲るに空同子（夢陽）は意を古範に刻し、形を宿鏌に鑄て獨り尺寸を守る。僕は則ち材積に富み、神情を領會し、景に臨みて構結し、形迹を倣ざらんと欲す。

（何景明何大復先生集卷三十二　與李空同論詩書）[8]

詩作する場合に、李夢陽は形の模倣からはいり、自分は表現したいことを畜積した上でイマジネーションを得て、實際に卽して書いてゆき、典型の模倣を避けたいのだ。この部分を讀んだだけでも當時の何景明と李夢陽の距離がかなり遠かったことを伺うに足る。何景明はこのように彼我の違いを説明した後、古文辭派が各朝代の詩に對してつけたランキングを要約し、自らと李夢陽雙方の逸脱を告發する。

近ごろ詩は盛唐を以て尙と爲し、宋人は蒼老にして實は疎鹵となし、元人は秀峻に似て實は淺俗となす。今僕の詩は元習を免かれ

ずして空同の近作は間ま宋に入る。僕は固より蹇拙薄劣、何ぞ敢えて自ら古人に列せんや。空同は方に數代を雄視し、振古の作を立つるも、乃ち亦た此に至るは何ぞや。

最後の一言がどれだけ李夢陽にこたえたかは想像するに餘りある。なにせ彼は「宋人は理を主とし理語を作す。是に於いて風雲月露を薄んじ、一切剷去して爲さず。…若し專ら理語を作さば何ぞ文を作らずして詩を爲るや。」（缶音序）と宋詩を強く排撃している人間である。その彼に向かって「空同の近作は間ま宋に入る」では皮肉がききすぎだが、李夢陽が日常生活で詩作する場合には自然に自ら排撃する宋詩風に仕上がってしまう矛盾を鋭く衝いている。この書簡を何景明は次のようにしめくくる。少し長いが以下に引用する。

僕堯舜周孔子思孟氏の書を觀るに、皆相沿襲せずして相發明す。是の故に德は日びに新たにして道廣し、此れ實に聖聖傳授の心なり。後世の俗儒は專ら訓詁を守り、其の一説を執りて終身解せず、相傳の意に背けり。今の詩を爲るや類を推し變を極め、其の未だ發せざるを開き、其の擬議の迹を泯して以て神聖の功を成さず、徒らに其の已に陳きを叙して修飾成文し、稍や舊本を離るれば便ち自ら杌稈すること、小兒の物に倚りて能く行き、獨り趨りて顚仆するが如し。これに由れば卽い曹劉、卽い阮陸、卽い李杜と雖も且つ何を以て道化に益せんや。佛に筏の喩有り。言うこころは筏を捨つれば則ち岸に達す、岸に達すれば則ち筏を捨つる。今空同の才以て世に命ずるに足り、其の志は金石をも斷つべく、又超代軼俗の見有り。僕の遊從して作述を覩るを獲て自り今かつ十餘年來なり、其の高き者は前人の外たること能わざるなり。下なる者は已に近代を踐めり。自ら一堂室を創り、一戸牖を開き、一家の言を成して以て不朽に傳わる者は、空同の撰に非ずして誰なるや。

この物の言い方は『列朝詩集』に於ける錢謙益などものの數にも入らぬすさまじいものである。「今の詩を爲る」ものとは第一義的には參考書の類をたよりに詩を書く多數の教養俗物どもを指すのであろうが、勿論主な攻撃目標は李夢陽である。その創作は過去の文獻からひとたび離れたら赤ん坊の足どりのようなもので、何かにすがっている時にはうまく歩けても一人になるとパタッと倒れる態のものだ。一字一句の剽竊をいくら重ねても詩にはならない。こんなにすばらしい才能と見識をもつあなたが書いた作品は、良質の部分は唐以前の詩作の範圍を一歩も出ないし、だめなものは近代の詩人の轍を踏んでいる。これは殆んど古文辭派の中心理論を自己否定しているに等しい。今引いた文章の中に「捨筏登岸」という禪語を少し變えた表現を用いて學ぶ對象を捨象せずに眞の創性造に至ることはないと斷言している箇處があり、これなどは王漁洋の筆致に限りな

く近いと言える。

二―二．李夢陽の反攻

このような書簡をうけとった李夢陽はただちに反論した。

子我が文を擿して曰く、子の高處は是れ古人の影子のみ、その下なる者は已に近代の口に落つと。又曰く、未だ子の自ら一堂奥を築き、突に一戸牖を開くを見ざるに、何を以て不朽に急なるやと。

（李夢陽空同集巻六十二　駁何氏論文書）[4]

ここの原文は「其の高き者は前人の外たること能わず、下なる者は已に近代を踐めり。自ら一堂室を創り、一戸牖を開き、一家の言を成して不朽に傳わる者は、空同の撰に非ずして誰なるや。」であって、記憶に從って引用する過程で明らかに自らに向けられた惡意の増幅が行なわれたことが見てとられる。何景明の論駁そのものが本人から出ているのではなく、側近から出ていると奇怪な斷定を下した上で、いよいよ基本問題に觸れてくる。

古の工、倕の如く班の如きは、堂は殊ならざるに非ず、戸は同じきに非ざるなり。其の方と圓とを爲るに至りては規矩を舍つること能わざるは何ぞや。規矩は法なり。僕これに尺尺して寸寸たるは固より法なり。もし僕古の意を竊み、古の形を盗み、古辭を剪截して以て文を爲らば、これを影子と謂うも誠に可なり。もし我の情を以て今の事を述べ、古法に尺寸し、其の辭を襲うこと罔ければ、猶お班倕の圓を圓とし、倕班の方を方とし、而して倕の木は班の木に非ざるがごとし。これ奚ぞ可ならざらんや。

詩を書く際には必ず「法」を嚴格に守らなければならない。それはあたかも職人が毎回違ったものを作るにもかかわらず定木とコンパスを手離せないのと同じなのだ。自分が汲々として古人から學んでいるのはこの「法」なのであって、決して古人の詩句の斷片などではない。以下何景明の論難の一字一句にからみながら反駁を加える。

堯舜の道は仁政を以てせざれば天下を平治すること能わざる者なり。子は我の尺寸なる者を以て言えり。子の作を覽るに法に於いて蔑み、宜しく惑いの解かるること靡かるべし。阿房の巨、靈光の歸、臨春結綺の侈麗なる。楊亭葛廬の幽たる寂たる、未だ必ずしも皆は倕と班とこれを爲るにはあらざるなり。乃ちそのこれを爲るや大小方圓に中らざること鮮きは何ぞや。必ず同じき者有ればなり。必ず同じき所を獲れば、寂たるも可なり、幽たるも可なり、侈にして以て麗たるも可なり、歸たるも可なり、巨たるも可なり。これを守りて易えず、久しくして推移し、質に因り勢に順い、融鎔して自ら知らず、是に於いて曹となり劉となり、阮となり陸となり、李となり杜となり、卽し今何大復（景明）となる

も、何ぞ可ならざらんや。

自分が古人から學んでいる「法」は、あたかも堯舜の道が「仁政」によって貫ぬかれているように、ありとあらゆる優秀な文學者が無意識に守っているものである。阿房宮や靈光殿の華麗な建築物のすべてを倕や班のような優秀な職人が作ったわけではないのに四角や圓がきわめて正確に描かれているのはなぜか。それは共通の定木とコンパスを使っているからであって、普通の人間が詩を作ってなんとかサマになるのも「法」にのっとって書くからなのだ。「法」そのものは變化しないがそのあらわれ方が時代の推移に從って自然に變化し、巨匠の作品として結晶化する。現代では何景明君、君こそが「法」の具現者なのだよ。かくのごとく汗水たらしての抗辯であるけれども、「法」の具體的な内容となるとさすがの李夢陽もうまく説明できていず、説得的ではないと思ったらしく、再度何景明に書簡を送り、同じ問題を論ずる。まず冒頭で、

夫子の近作の先法に乖る者は何ぞや。蓋し其の詩はこれを讀むに沙を摶にし、泥を弄するが如く、散じて瑩かず、又蠹き者は雅ならず。

（空同集卷六十二　再與何氏書）

と何景明の近作を大上段からけなした上で、ついに「法」の内容を説明する。

古人の其の法を作るや多端なりと雖も、大抵は前疎なれば後必ず密にして、半ばは濶なれば半ばは必ず細なり。一實なれば必ず一虚なり。景は疊ねれば意は必ず二なり。此予のいわゆる法にして、圓を規でえがき方を矩でえがく者なり。

猿にらっきょうをむかせると、最後は何もなくなって怒りだすと聞くが、これでは李夢陽の「法」はまさにらっきょうのごとく中味が雨散霧消してしまっている。

夫れ文と字は一なり。今人古帖を模臨するに卽ち太だ似るを嫌わずして反って能書と曰う。何ぞ獨り文に至りては自ら一門戸を立てんと欲するや。

とこの書簡は續くが、事ここに至っては李夢陽はかなりヤケ氣味、問うに落ちず語るに落ちたとはこのことだ。「法」とは殆んど無内容な存在で、古文辭派の中心理論はやはり徹底的な模倣によって詩の外貌を可能なかぎり古えの優秀な詩のそれに相似化してゆくことによって本物の詩（らしきもの）を普通人にも書かせることにほかならなかったのである。

これで彼等二人の論點は出盡くしたのであるが、これだけ離れてしまった兩雄の立場を調整しようという人間があらわれるところに古文辭派のユニークさがある。時の氏神は前七子の一人王廷相である。

二―三．王廷相の見解

王廷相は前七子の中にあって最も高い官位に登ったが、文學的にはそれ程目立った存在ではない。その詩業は錢謙益の『列朝詩集』[5]小傳でも「子衡（王廷相の字）の五七言古詩は、才情觀るべきも、摹擬して眞を失い、其の論詩と頗る相反す。今體詩は殊に解會無く、七言は尤も笨濁爲り。」とひどい言われ方をしている。ただその詩論は今引用した部分で逆説的に示されている通り、かなり高い水準にある。とにかく彼の言説に耳を傾むけてみよう。

夫れ詩は意象の透瑩たるを貴び、事實の黏著するを喜ばず。古ひと謂わく、水中の月、鏡中の影、以て目睹す可きも、實を以て是を求め難きなりと。

（王廷相王氏家藏集卷二十八　與郭价夫學士論詩書）[6]

まずは『滄浪詩話』の有名な一條を引いてきて何景明に微笑をなげかける。この書簡がいつ書かれたかはまったくわからないが、李何兩氏の論爭を踏まえて議論を展開していることは確實だ。すぐれた詩というものは、そのイメージが透明でキラキラ輝いている存在であって、それが表現するとされる「事實」を深く追及してはならず、そのイメージそのものを鑑賞しなければならない。水中の月、鏡の中の像が「事實」とは違っていることを認識し、むしろ「事實」と表現のズレを樂しまねばならない。これは詩の獨創性・自律性を重視する何景明への頌辭であろう。以下この理想を體現したものとしては詩經と楚辭があり、杜甫・韓愈・盧仝・元稹の詩はその變體であり旁軌であると要約した上で、李夢陽の立場に今度は接近してゆく。

然りと雖も、工師の巧みなるは、規矩を離れず、畫手の倫に邁るは、必ずや擬摹を先にす。各おの體裁を具え、蘇李曹劉、辭は畀域を分つ。文囿の撰を擅ままにせんと欲すれば、須らく極古の遺を參すべし。其の步武を調え、其の尺度を約し、以て我は則ち已むこと能わざると爲し、これを久しくして純熟す。それ自り悟入し、神情は肺腑に昭かに、靈境は視聽に徹す。開闔起伏、出入變化し、古師の妙擬は悉く我が闥に歸す。是由り翰を搦りて以て思を抽けば、則ち遠古卽今、高天下地、凡そ形象の屬、生動の物を具え、綜攝して我が材品と爲らざる靡し。辭を敷して以て意に命ずれば、則ち凡そ九代の英、三百の章、及び夫の仙聖の靈、山川の精、會協して我が神助と爲らざるは靡し。此れ外自り取る者に非ざるなり、習いて我に化す者なり。

すぐれた職人はコンパス・定木を手離すことはないし、よい畫家はまず他人の作品を摹擬することから始める。それと同樣に詩を學ぼうとする者もまず過去の文學作品を摹擬することから入る。古代からはじまって各時代の詩風を十分に辨別してとらえ、詩の作り方を

確立したのちにそれにとらわれずに詩作できるようになる。そこから更に「悟入」すれば、これまで學び畜積してきたことのすべてが化して自己の所有物となり、自在に創作することが可能になる。

これが王廷相の考え方の粗筋であるが、李夢陽に何景明をうまくつないだと大まかには言えるだろう。李夢陽に於いては「法」を遵守した摹擬にとどまり、最終目標を示せなかった理論水準を一歩進めて、學習をかさね材料を蓄積してゆけば眞の創造性を得ることができると主張する王廷相のこの路線は、後七子に至る古文辭派の基本戰略となった。李攀龍[7]が行った漢魏の古詩に對する摹擬も、一字一句にわたるしきうつしだという批難にも拘らず、より大きな文學の自由を求めることを最終の目的としていたのである。古文辭派の理論の枠組は中國養生術でいうところの築基功から自發動功へという傳統的な基本概念と期せずして一致する。それが一般の知識層に容易に受け入れられたのもうなずけるのである。彼等の實踐は殘念ながら摹擬の段階にとどまり、書かれた詩がゆらぎ出すところまではいかなかったが、彼等の理論は萬人が詩作する國の文學論としてあり得べき道をまことに正確に指し示していたのであった。

以下の章では清初に登場した王漁洋が、古文辭派の理論をいかに繼承し、いかに發展させたかを見てゆこう。

三．王漁洋の基礎條件

王漁洋は山東に生まれた。このことはおそらく彼の文業に巨大な影響をもったと考えられる。中國は地方によって文化が大きく異なっている。一般によく言われていることでは、北方は田舎臭く融通がきかない、南方は頭の回轉が早くスマートということである。言葉をかえていえば北方は重厚、南方は輕薄といったところか。山東は北方に屬し、その中でも「魯鈍」とされる御國柄であった。現代でも山東人は「秘書にもってこい」と言われるだけに、誠實でおとなしい感じの性格の人が多いとされている。前七子には邊貢が、後七子には李攀龍がいて、二人とも山東人であったために、この地では古文辭派が爆發的に流行し、他の地方で古文辭派が廢れかけた時も、山東では律義に一定の勢力を保ちつづけてきた。

山東新城の王氏は一帶の望族として官界に多くの人材を輩出、山東の古文辭派の一翼をになっていたのであった。ここで『帶[8]經堂詩話』卷七家學類の記事によって王漁洋の前の世代の人々の文學をうかがい、彼の文學の基礎條件を探ってみよう。

三―一．祖父の世代

(1)三伯祖象蒙、萬曆八年の進士、陽城の知縣から監察御史、最終官は光祿少卿、今見ることのできる作品は樂府體の四首、そのうちの

一首をここにあげてみよう。

鳳兮鳳兮集高岡　鳳や鳳や高岡に集まる
七德九苞稱至祥　七德　九苞　至祥と稱せられ
五音六律鳴朝陽　五音　六律　朝陽に鳴く
鳴朝陽　朝陽に鳴き
應明主　明主に應ず
非帝庭　帝庭に非ざれば
寧高擧　寧んぞ高擧せん

このような代物であって、とても王漁洋の詩業の先蹤とは言えない。

(2)祖父象晉、萬曆三十二年の進士、最終官は浙江右布政使。詩名はないが、『群芳譜』（様々な文學にあらわれた植物を考證。）『清寤齋欣賞編』（處世・生活に關する隨筆。）『秦張詩餘合璧』（宋の秦觀・明の張綖の詞を合刻した書。）等の著書があって、博學で藏書家でもあった王漁洋のある一面の先蹤となっている。

(3)八叔祖象艮、最終官は姚安府同知、迂園詩集がある。王漁洋はその詩業を評して「謹しんで唐人の矩矱を守り、尺寸を失なわず。」と言っているからおそらくは古文辭派中の人であったろう。

滿院秋光帶晚霜　滿院の秋光　晚霜を帶び
人同寒雁立斜陽　人は寒雁と同に斜陽に立つ
年華老大無風味　年華老大にして風味無く
世事喧爭總劇場　世事喧爭して總べて劇場
庭葉掃除旋自落　庭葉掃除して旋りて自ら落ち
籬花開盡尙餘香　籬花開き盡くして尙お餘香あり
迂園三徑蕭條後　迂園　三徑　蕭條たるの後
柯柏亭亭色轉蒼　柯柏　亭亭として色轉た蒼し

これは『明詩紀事』庚籤卷八に引かれた彼の詩であるが、「斜陽に立つ」「老大」「總べて劇場」などたいへん荒っぽい言葉使いになっている點、典故を殆んど使っていない點からも、杜甫の壯大さ强烈さばかりを學んで纖細さを學ばなかったとされる古文辭派の惡い面を素直に繼承してしまった人であることがよくわかる。また王漁洋が王象艮の佳句として擧げているのには例えば「蕭條たり兩岸の柳、怊悵す五更の雞」「南雁花を迎うること早く、東風雪を帶ぶること多し」等であるが、まったく平凡そのもの、三流の唐詩位の格はあるだろうか。

(4)十叔祖象節、萬曆二十年の進士。翰林院檢討となった。若くして詩名があったが詩稿は殘っていない。鄭獨復の『新城舊事』に「古寺人來たりて花供と作し、孤城春盡きて草煙の如し」という遺作が載っているらしいが、これまた凡庸な作品である。

(5)十七叔祖象春、萬曆三十八年の進士。南考功郎中にいたった。祖

父の世代ではもっとも詩名があり、古文辭派のかくれもない一員であった。錢謙益の列朝詩集丁集下の小傳に言う、

季木（象春の字）の詩文に於けるや、輩流を傲睨し、推遜する所無く、獨り心を文天瑞（翔鳳の字）に折る。兩人の學問は皆近代（古文辭派）を以て宗と爲す。天瑞詩を贈りて曰く、元美（後七子の一人王世貞の字）吾兼愛す、空同（李夢陽の字）爾が獨師と。

萬曆の末年に京師で二人と會い、錢謙益は古文辭派の理論はいけないと戒め、李翔鳳は降參したが、王象春はかたくなに同意を拒んだ。このように述べたあとで王象春に對して最終的な評價を下す。

季木は則ち西域波羅門教の邪師外道にして自ら門庭有り。終に皈依正法し難し。季木問山亭詩は數千篇を下らず、而して余これを錄すること斤斤たる者は、誠に千古の事を以て亡友を無窮に累するに忍びざればなり。

まったくひどい言い様であるが、漁洋も「此れ戲論と雖も、其の言は自ら確かなり。」とこの評價を一應認めた上で、十首のうちせめて二、三首は後世に傳わると述べる。さて象春の傑作として彼が擧げるのは「項王廟樂府」である。

三章既沛秦川雨　　三章既に沛（さか）んなり秦川の雨
入關更縱阿房炬　　關に入りて更に縱（ほしい）ままにす阿房の炬
漢王眞龍項王虎　　漢王は眞龍にして項王は虎
玉玦三提王不語　　玉玦三たび提するも王語らず
鼎上杯羹棄翁姥　　鼎上　杯羹　翁姥を棄つ
項王眞龍漢王鼠　　項王は眞龍にして漢王は鼠
垓下美人泣楚歌　　垓下の美人　楚歌に泣き
定陶美人泣楚舞　　定陶の美人　楚舞に泣く
眞龍亦鼠虎亦鼠　　眞龍も亦た鼠にして虎も亦た鼠

これは何とも言えぬ床屋政談的な粗末な詩であって、萬曆年間に名聲のあった詩人の作としては途方もない駄作である。王漁洋は身内には點が甘いのだろうか。王象春は古文辭派の中でも二流の詩人であったのだろう。他に彼の若い頃の佳句として「故人　江漢に絕え、疎雨　戸庭を過ぐ」を擧げ、「大復（何景明の字）蘇門（高叔嗣の號蘇門山人を指すか？）に減ぜず。」と評するが、これも身内びいきの最たるものだ。

(6)十八叔祖象明。事跡はよくわからない。王漁洋によって後世に傳わるべしとされた作をあげると、

日日輕雷送雨聲　　日日の輕雷　雨聲を送り
小窻歷亂竹枝橫　　小窻　亂を歷（へ）て竹枝橫たわる
水痕時落還時漲　　水痕時に落ちて還た時に漲（みなぎ）り
枕上看山秋欲生　　枕上山を看れば秋は生ぜんと欲す

などというなんとも小さな趣味の、月並な唐詩風の作品であって、詩人としてまったく秀れていなかったことは明らかである。

三―二．父の世代

父の世代は祖父の世代に較べて地味である。進士となって官界に入った人も少なければ（新城の王氏一族全體で、祖父の代では九人、父の代ではわずかに二人である。）、詩人として中央詩壇に名を成した人も出ていない。王漁洋の回想に登場するのは三人だけだ。

(1)父の兄與胤、崇禎元年の進士、官は御史。崇禎十七年四月二十六日、明の滅亡を聞いた彼は妻子とともに自宅で縊死した。詩集に『隴首集』一卷が有り、王漁洋遺書に收められているが未見である。王漁洋は彼の「詠梅」という詩を擧げる。

繁英任似火　繁英は任ま火に似たり
冰稜自如石　冰稜は自ら石の如し
南枝與北枝　南枝と北枝と
不作春風格　春風の格を作さず

王漁洋の友人陳允衡が「公の忠烈の性、已に此に見わる」と評しているように、まことに生眞面目な作風で、詩人としてどうだこうだと評價する對象ではなさそうだ。

(2)再從伯與玫、從兄士驥の父である。官歷は無い。王漁洋が秀句として引く「二十五年將に就木せんとし、一千里の路書を通ぜず。」「熒熒たる白兎東西を顧りみ、恰恰たる黄鸝四五たび聲をあぐ。」等を見れば、とりたてて優秀な詩人であったとは思えない。豔體の詩を好んで作り、著に『籠鵝館集』があって齊魯の間に行なわれたという。山東にだけ通用するような地方詩人だったのだろう。

(3)父の與敕、布衣に終わった。詩作は全く殘っていない。それに對する王漁洋の説明を聞こう。「先府君與勅、字は欽文、別字は匡廬。少くして駢麗の文に工みなり、晩年も猶お間これを爲る。中歳好みて詩を爲るも、不孝兄弟間編錄せんことを請えば輒ち許さず。曰く、吾は偶ま懷抱を寫すこと絃の音有るが如し。既に絃停まり音寂たれば、何ぞこの枝贅を留むるを用って爲さんやと。」自分の詩作は樂器を演奏するようなもので、その時その時の氣分を卽興的に表現するだけだ、だから記錄するには及ばない、というのは自信のなさを素直に述べたのであろう。もし本當に父親に佳句が有れば、王漁洋ともあろう人が瞬時に記憶して得々と引用するはずなのにそうしないのは、先の推定を逆に裏づけていると考えられる。

三―三．まとめ

以上、王漁洋の詩業の基礎となった彼の家庭環境を見てきたが、次のように總括することができるであろう。祖父の代では山東で壓倒的な勢力をもっていた古文辭派の影響を強く受け、彼等の理論に沿って詩作する人が多く出現したが、詩人としては三流のレベルに

とどまっていた。就中もっとも有名な王象春も、錢謙益の同年の友人ということだけで『列朝詩集』に錄されたのにすぎないのであって、その作品が全然すぐれていなかったことは已に考證した通りである。父の代では明清の王朝交代期にあたったせいもあってか、祖父の代よりもずっと活氣がなく、詩人らしい人は殆んど出ていないと言ってよいだろう。

このような條件のもとで生をうけた王漁洋が如何にしてその優れた詩學を形成するに至ったか、次章では彼の修行時代に目を向けてみよう。

四、王漁洋の修行時代

王漁洋は四人兄弟であった。崇禎七年に生まれた時、長兄士祿は九歲、次兄士禧は八歲、三兄士祜は三歲であった。翌年祖父の象晉は浙江布政使となり、一族は最盛期を迎えた。兄弟四人のうち、王漁洋を含めて三人までが後に進士となった程であるから、彼等は幼い頃から鄉塾あるいは家塾で嚴しい訓練を受けていた。惠棟撰『漁洋山人精華錄訓纂』に附載されている「漁洋山人自訂年譜」から關連する記事を拾っておこう。王漁洋は七歲にして鄉塾に入り、八歲で始めて詩をつくっている。

山人幼くして聖童の目有り、肄業の暇には卽ち私かに文選唐詩を取りて洛誦し、これを久しうして學びて五七字の韻語を作る。時に西樵（士祿）諸生と爲り、詩を爲るを嗜む。山人の詩を見て甚だ喜び、劉頃陽編する所の唐詩宿中の王孟常建王昌齡劉眘虛韋應物柳宗元數家の詩を手ずからこれを抄す。盛侍御珍示曰く、先生八歲にして詩を能くす。西樵吏部授くるに王裴の詩法を以てす。

王漁洋の最初の文學の師は兄士祿であった。兄士祿は古文辭派の人々が信奉した李白や杜甫ではなく、王維・孟浩然等古文辭派の文學觀からすれば傍流の詩人を好んで幼い王漁洋に讀ませた事は特筆に値する。彼等四人兄弟は家塾の「東堂」で科擧のための學問とともに作詩の修行にもはげんでいた。『帶經堂詩話』卷七家學類には次のように言う。

予兄弟少きとき東堂に讀書す。堂の外は青桐三、白丁香一、竹十餘頭のみ。人跡至ること罕に、苔蘚階を被い、紙窻竹屋、燈火相い映じ、咿唔の聲相い聞う、是の如き者十年なり。長兄考功先生詩を爲るを嗜み、故に予兄弟も皆詩を爲るを好む。嘗て歲莫大いに雪ふり、夜堂中に集りて置酒す。酒半ばにして王裴輞川集を出し、約して共にこれに和す。一詩成る毎に、輒ち互いに賞激彈射す。詩成りて酒盡き、而して雪は止まず。

これはまさに盛珍示が言う「王裴の詩法」を兄が弟達に授けている場面であって、王維・孟浩然以下何人か擧げられている中で、特に

王維が重視されていたことがよくわかる。彼等がどのように「王裴の詩法」を學んだかは、『帶經堂詩話』の同じ箇處に引かれる次の話によくあらわれている。

兄諱は士祜、字は叔子、一字子側、號は東亭、常熟の官署に生まれ、因りて小字は虞山という。年十許歲の時、嘗て雪夜に東堂に集る。長兄偶たま輞川絕句を簡びて命じて屬和せしむ。兄の詩先に成り、「日は落つ空山の中、但だ樵響の發するを聞く。」の句有りて、長兄激賞す。

長兄王士祿が「激賞」した句は、王維の「空山人を見ず、但だ人語の響くを聞く。」（鹿柴）の完璧なしきうつしであって、李攀龍が漢魏の古詩を摹擬したのとまったくかわりはない。古文辭派の方法によって王維の詩を摹擬していると斷定してさしつかえないだろう。彼等兄弟はこのような機會を度々もち、古人の詩に和するという名目で古人の詩を摹擬し、詩を書く行爲をゆっくりと學んでいったのである。

「漁洋山人自訂年譜」の崇禎十七年漁洋十一歲の條に見える次の記事もたいへん氣になる。

時に方伯公（王象晉）遺老を以て田間に居り、自ら明農隱士と號す。門を闔ざして客を謝し、親しく諸孫に教え、頗る聲律の學に及ぶ。

この記事からは二つのことが推定される。古文辭派の雰圍氣を濃厚に殘していた祖父が當時健在で、親しく文學を授かったこと、その内容が詩の聲律に關するものであったこと、の二點である。後年王漁洋は古詩近體詩の聲律の學を確立するが、その源は意外にも祖父にあったかもしれない。

王漁洋の幼年時代の文學修行についてはだいたい右の通りであるが、彼は十五歲の時にそれまでの總結算として『落箋堂詩集』一卷をまとめ、王士祿が序文を書いて刻したと年譜にはある。古文辭派の方法によって、李白・杜甫の詩ではなく、王維・孟浩然の系統の作品を摹擬した内容になっていたはずなのだが、奇妙なことにこの書物は現在まったく殘っていない。今見られる彼の少年時代の作品は『落箋堂詩集』以後、『漁洋詩集』までのものであり、現存する彼のもっとも初期の詩集である『漁洋詩集』は順治十三年二十三歲からの作品を收めており、無論修行時代の作品は未收である。『落箋堂詩集』はどうなったのだろうか。私は漁洋自身によって破棄されたと考える。『落箋堂詩集』を刻した後に何が起こったのか、それは次章で論ずることとする。ともかく王漁洋の修行時代は十五歲で終わり、それまでの作品の一切を捨てさることによって彼は大きく變わってゆく。ゆらぎの詩學にむかって一歩を踏みだしたのである。且聽下次分解。

注

(1) 衛の内亂にまきこまれた子路が、戰死する直前に冠のヒモを切られ、「君子は死すとも冠は免がず。」と言って結びなおした後に死んだという話を踏まえる。（史記卷六十七仲尼弟子列傳）

(2) 四部叢刊所收明正德間侯官李氏觀槿齋刊本。

(3) 清咸豐二年重刊本世守堂藏本。

(4) 萬曆二十九年李思孝刊本。

(5) 清順治九年虞山毛氏刊本。

(6) 民國六十五年五月臺北偉人圖書出版社用嘉靖十五年序刊本景印本。

(7) 岩波版『元明詩概説』二百頁參照。

(8) 人民文學出版社排印一九八二年十一月第二次印刷本。以下この章では特に注記のない場合は『帶經堂詩話』からの引用である。

(9) 貴陽陳氏聽詩齋刊本。

(10) 未見。引用は『帶經堂詩話』による。

(11) 四部備用本による。